コルロの星の王子さま

平野文鳥/作

ちきゅう歴４６４９年の１月１日。

“ちきゅう”とよばれる惑星から、ひとりの少年を乗せたロケットが宇宙へと旅立ちました。
その目的は、環境汚染で住めなくなってきた“ちきゅう”のかわりとなる星を探すことでした。

なぜそのような重要な任務にその少年が選ばれたかというと、
もし、旅の途中で事故がおこり二度と“ちきゅう”にもどれなくなったとしても、その少年は怖いとか、悲しいとか、さびしいとかいう感情がわかないので適任だろうという、科学者たちの意見があったからです。

実は、その少年の頭脳や体はすべて機械でできていて、人間のような感情を作り出す“心”がなかったのです。

「ボク、“ちきゅう”のみんなのために、かならず素晴らしい星を見つけるね。約束するよ！」

少年は遠ざかる“ちきゅう”を見ながら、そうつぶやきました。
でも、その声には何の感情もありませんでした。

星探しの旅を始めて１年後のことです。

少年はロケットの前方に青く輝く星を発見しました。
それは“ちきゅう”と同じように水や緑のある星でした。

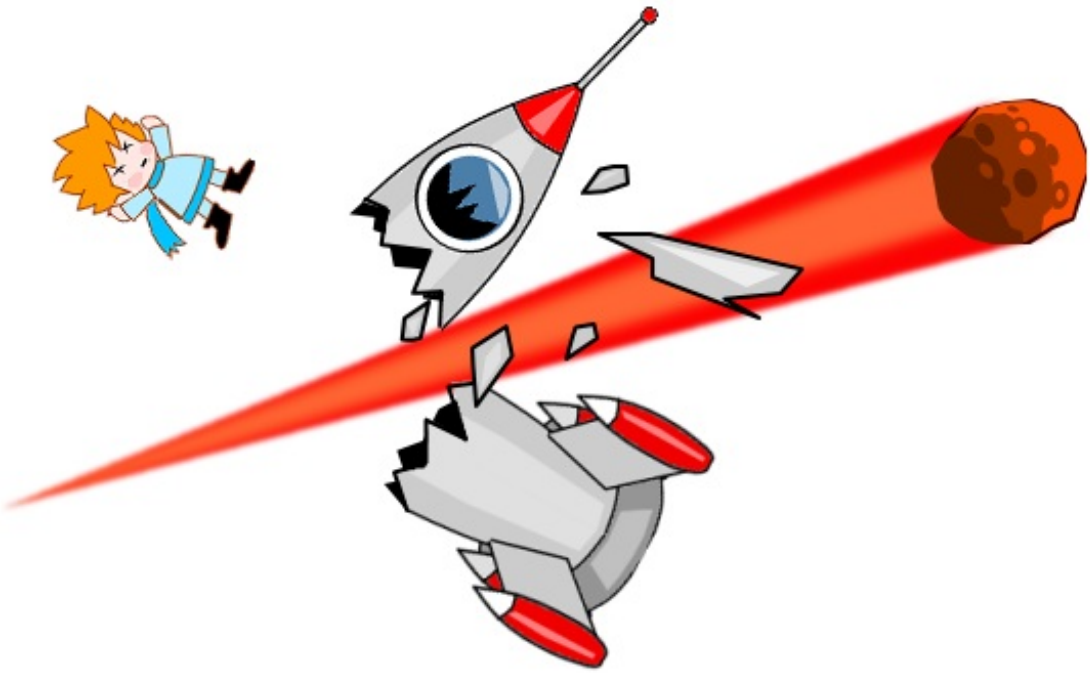
「見つけた。これで“ちきゅう”のみんなとの約束が守れるぞ」

普通の少年ならここで大喜びして、小おどりするところでしょうが、
少年には心がなかったので、いつもどおりに無感情につぶやきながら
その星に向かってロケットのスピードをあげようとしました。

と、その時！

突然どこからか飛んできた星のかけらが、ロケットに激突しました。

ロケットはバラバラになり、少年は宇宙へ放り出されてしまいました。



幸いなことに、少年の体は機械でできていたので、宇宙空間に放り出されてもぜんぜん平気でした。

そして感情を作り出す心もなかったので、もう二度と“ちきゅう”にもどれないとわかっていても、怖いとか、悲しいとか、さびしいとかいう感情もわきませんでした。

ただ、少年にはひとつだけ気になっていることがありました。

（ボク、“ちきゅう”のみんなのために、かならず素晴らしい星を見つけると約束したのに、もう守れない……）

少年はそう思いながら、宇宙を１０年間さまよい続けました。

宇宙をさまよって１１年目のある時。

少年は不思議な力に引き寄せられて、ある星に着地しました。
そこは何もない荒れ果てたとても小さな星でした。

「ここは素晴らしい星じゃないな……」

少年はそうつぶやきながら、手で地面の土を掘りおこしました。

「痛いっ！　何をするっ！」

突然、どこからか人の声が聞こえました。
少年は思わずあたりを見回しました。しかし、星にはだれもいません。

「変だな？」

不思議に思った少年は、もう一度地面の土を掘りおこしてみました。

「だから、痛いと言っておるじゃろが！」

なんと信じられないことに、その声の主はこの小さな星だったのです。

「あなたは、だれ？」
「おまえこそ何者じゃ？　わしの許可なくこの星に入りおって！」
「ボク？　ボクは星探しを命じられた少年だよ」

それから少年は任務の内容や、今まで起こったすべての事をていねいに正確に説明し続けました。ところが、その説明があまりにも長いので声の主は途中で飽きてしまいました。

「わかった、わかった。つまり早い話が、おまえはもとの星にもどれなくなった宇宙の迷子というわけじゃな」
「うん。じゃあ、今度はボクの質問に答えて。あなたは、だれ？」
「わしか？　エッヘン！　わしはこのコルロの星の王さまじゃ」
「王さま？　どこが？　どのあたりが？　だれもいないのに？何もないのに？　変なの……」

王さまは、その少年の言葉にムッとしました。なぜなら少年の無感情なしゃべり方が自分をバカにしているように聞こえたからです。でも、すぐに気を取り直して威厳のある声で少年に言いました。

「どうやらおまえは、行くところがなくて困っておるようじゃの……。よし、わかった！　少年よ、喜ぶがよい。わしの寛大な心でおまえがこの星の国民になることを許可しよう」
「どうして？」
「どうして？　……それはわしが、そうしてあげたいからじゃ」
「変なの……」
「それでは、コルロ王国の国民第１号である少年よ。命令じゃ！わしとおまえがここで楽しく暮らせるように、おまえはここを豊かな星にするのじゃ」
「やだ」

少年は王さまの命令を、あっさりと断りました。

「なんじゃと！　わしの命令にさからうのか。国王を４６億年やってきたが、今までわしにさからうような国民はひとりもいなかったぞ！」
「あれ？　ボクが国民第１号だったよね？　変なの」
「うっ……。だ、だまれっ！」

王さまは少年の言葉にプライドを傷つけられ、とても怒りました。
すると、その怒りのせいで王さまの頭から火山がムクムクと出てきて噴火し、そして流れ出た溶岩がたくさんの山を作りました。

「おお！　山じゃ、山ができおった！」

王さまは自分の星に山ができて、とても驚きました。

「そうか、そうか。おまえはこの星に山を作ろうと、わざとわしを怒らせたのじゃな。なかなか立派な国民じゃ。では、褒美（ほうび）として、おまえをこの星の大臣にしてやろう」
「やだ」

少年は王さまの褒美（ほうび）を、
また、あっさりと断りました。

「そうか、そうか。おまえはわしの褒美（ほうび）がとても嬉しくて
遠慮しておるのじゃな。かわいいやつじゃ」

王さまはとても機嫌が良くなって、大きな笑顔を浮かべました。

すると、王さまの頭の上に小さなお日さまが現れ、星全体を明るく
照らし始めました。

「おお、なんと明るい！　そうか、こんどはお日さまを作るために
わざとわしを喜ばせたのじゃな。うむ。おまえはすばらしい大臣じゃ。
では、わしの心を込めた最高の褒美（ほうび）として、おまえを
この星の王子にしてやろう」
「やだ」

少年は王さまの命令を、またまたあっさりと
断りました。

「なぜじゃ？　なぜ、この星の王子になるという栄誉を断るのじゃ？
もしかして、王子になるとわしの後継になると思っておるからか？
そうか……。それほどまでに、わしのことが嫌いなのか……」

王さまは、とても悲しくなってオイオイと泣き始めました。

すると、王さまの目から流れ出た大量の涙が川を作り、その川が海を作りました。

「おお、こんどは川や海までもが！　……なるほど、そうじゃったのか！
おまえはここを豊かな星にするために、わざとわしの命令や褒美（ほうび）を断り続けたのじゃな」
「ぜんぜん」
「よいよい。謙遜しなくとも。それでは次の褒美（ほうび）として……」

と、言いかけて王さまは困ってしまいました。
なぜなら王さまは、少年を王子にする以上の
褒美（ほうび）が思いつかなかったからです。

さらに王さまは、褒美（ほうび）を与える
こと以外に、相手に感謝の気持ちを
伝える方法を知らなかった
ので、どうしてよいのか
わからなくなってしまいました。

すると、今までのようすを見ていた少年が王さまに質問をしました。

「ねぇ、王さま。どうして、山やお日さまや川や海ができたの？」
「それは、おまえがわしを怒らせたり、喜ばせたり、悲しませたりしてくれたからじゃ」
「オコル？　ヨロコブ？　カナシム？　……なに、それ」
「ハッハッハ！　おまえは面白いことを言うやつじゃの。感情に決まっておろうが」
「カンジョー？　なに、それ」
「おまえは、ふざけておるのか……」

王さまはムッとしました。すると、海から水蒸気がたちのぼって雲ができました。それを見た王さまは嬉しくなって機嫌がもどりました。

「ねぇ、教えて！　カンジョーってなに？」
「う～む……」

王さま考えこんでしまいました。そしてよく考えて、少年にわかりやすそうな言葉を選んで答えました。

「つまり、感情とは“心の動きがカタチになったもの”じゃ」
「ココロ？　なに、それ」
「なんと！　おまえは心もわからぬのか」
「うん！」
「う～む……」

王さまは少年の目をジッと見つめました。どうもウソをついているようには見えません。王さまは、この子は本当に感情や心が理解できない特別な子なのだろうと思いました。

再び少年が王さまにたずねました。

「そのココロというものがあれば、ほかの荒れ果てた星でも、ここみたいに山やお日さまや川や海が作れるの？」
「それは、やってみないとわからぬが……」
「じゃあ、お願い！　今までのご褒美（ほうび）のかわりに、王さまのココロをちょうだい！」

王さまは少年のとんでもないお願いにとても驚き、そしてあわてました。

「そ、それはムリじゃ！　ざんねんじゃが、わしの心は物ではないからおまえにあげることはできんのじゃ」
「ちょうだい！　ちょうだい！」

少年は感情のない声でおねだりを続けます。王さまは何か良い方法がないものかと、しばらく考えました。

「う～む……。もしかしたら、おまえ自身の力で心を作り出すことができるかもしれんのぉ……」
「じゃあ、作り方教えて！　ボク、自分で自分のココロを作る！」

少年はいつもより元気な声で言いました。

王さまは、少年の無感情ながらも何かを必死に求める純粋な目を見て少年の力になってあげようと決心しました。

「わかった。では、これからわしの言うことをよく聞いて学ぶがよい」
「うん！」

そして、その日から、王さまは少年が自分自信の力で心を作ることができるようにと、いろんな事を教え続けました。

１年たちました。
まだ少年は自分で心を作ることができません。

６年たちました。
まだ少年は自分で心を作ることができません。

そして１５年たっても、やはり少年は自分で心を作ることができませんでした。

「う～む……。こんなに時間をかけても、おまえが自分の心を作ることができないのは、わしの教え方に問題があったのかもしれんのぉ……。４６億年もひとりで生きてきたせいで、実はわし自身が心というものをよくわかっていなかったのじゃろうなぁ……」

王さまはそうつぶやくと、とてもガッカリして「はああ～っ……」と宇宙に響き渡るような深いため息をつきました。

「王さま！　はやくボクにココロの作り方を教えて！」

少年はいつものように感情のない元気な声でさいそくしました。

「すまんのぉ、少年よ……。とても長い月日を無駄につきあわせてしまって。わしは、なんだか疲れてしまったよ……」

王さまはとても弱々しい声でそう言うと、その目をゆっくりと閉じてしまいました。

「どうしたの、王さま？」

少年は王さまに何ども話しかけました。
しかし、王さまはずっと目を閉じたままで返事をしてくれません。

３日、１ヶ月、半年、１年……。

少年は、王さまが再び目を開けてココロの作り方を教えてくれるのを
ずっと待ち続けました。

でも、王さまがその目を開けることは二度とありませんでした。

そして、長い年月が、コルロの星を昔のような暗く荒れ果てた星に
もどしてしまいました。

ある日のこと。

すっかり荒れ果ててしまったコルロの星を、ジッと見続けていた少年の目から、一滴の温かい水がこぼれ落ちました。

少年はその温かい水が何なのかわかりませんでした。

それは少年の目からずっと流れ続け、荒れ果てたコルロの星の上で川になり、そして小さな海になりました。

それを見ていた少年は、胸の中で「何か」が生まれて、そしてそれが胸から出てゆくのを感じました。するとそれは小さなお日さまとなって、コルロの星を明るく照らし始めました。

「なんだか、昔の王さまみたいだなぁ……」

そうつぶやくと、少年はまた胸の中で新しい「何か」が生まれるのを感じました。そして、それは少年にある事を思い出させました。

それは、むかし王さまが少年にあたえようとした、いろいろな命令や褒美（ほうび）のことでした。

（どうしてボクは、王さまの命令に素直に従わなかったんだろう？
どうしてご褒美（ほうび）を素直に受け取らなかったんだろう？）

そう思った少年の胸の中で、また新しい「何か」が生まれ、それが
少年の口を動かしました。

「ごめんなさい、王さま……」

すると、突然コルロの星がとても明るく輝きだし、そのまぶしい光が
少年を包んでゆきました。

その光の中で、少年は胸の中で大きな「何か」が生まれてくるのを
感じました。そしてそれが再び少年の口を動かしました。

「王さま。ボク、やっと作れそうだよ。長い間、どうもありがとう」

それから少年の胸の中で、また大きな「何か」が次から次と生まれ始め
ました。まるでたくさんの星が生まれる宇宙の始まりのように。

「王さま。ちょっと遅くなったけど、あの時の最高のご褒美（ほうび）
を受け取るね」

少年がそうつぶやくと、少年を包んでいた
まぶしい光は弱まり、コルロの星は
またもとに戻りました。

ところが、なぜかそこには少年の姿はありませんでした……。

ちきゅう歴４７４９年の１月１日。

“ちきゅう”は環境汚染によって青黒い星になっていました。

その日、宇宙を観測していた科学者たちが、宇宙の彼方に明るく
輝く“ちきゅう”の何倍もある巨大な彗星を発見しました。

科学者たちはあわてふためきました。なぜならその彗星はどんどん
こちらへ近づいていて、数ヶ月後には確実に“ちきゅう”に衝突して
しまうことがわかったからです。

“ちきゅう”に住むすべての人々は絶望しました。

そして、数ヶ月後。

巨大な彗星はついに“ちきゅう”の目の前までやってきました。
人々は「いよいよこの星もおしまいか……」と覚悟を決めました。

ところが不思議なことに、その彗星は“ちきゅう”のぎりぎり手前で
ピタリとその動きを止めてしまったのです。

彗星がなぜ突然止まってしまったのか、その理由はわからないものの、とりあえずひと安心した“ちきゅう”の人々は、夜空に浮かぶその巨大な彗星を見上げて懐かしさのあまり涙を流しました。
なぜなら、その星はとても青く美しく、まるで１００年前の“ちきゅう”にそっくりだったからです。

どこからか、やさしい声が聞こえました。

その声は“ちきゅう”に住むすべての人々の胸の中で聞こえました。

（ずっと、待たせてごめんなさい）

人々は驚いてあたりを見回し、その声の主を探しました。
すると、ひとりの少女が夜空に浮かぶ彗星を指差してさけびました。

「見て、見て！　あのお星さま、笑ってる！」

人々がいっせいに夜空を見上げると、その巨大な彗星にひとりの少年の大きな顔が浮かんでいました。

その少年は喜び満ちた表情をうかべながら、再び“ちきゅう”の人々の胸の中に向かって元気な声で話しかけました。

（ただいま、みんな！
　ボクはコルロの星の王子さま。ボク、みんなとの約束、守ったよ！）

おしまい

コルロの星の王子さま

文と絵/平野文鳥
デザイン協力/MiMi
制作/スタジオ森のげえむ屋さん
http://www.mori-game.com/

(C)2012 SUTUDIO MORINOGAMEYASAN